恒久遠大の構想[[1]](#footnote-1)

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　孤舟

　戰爭に妥協なく、戰前一切の國際関係は御破算となつた、即ち戰前の日米交渉中に表明せられた平和處理案としての基礎條約一切はここに消滅し、帝國は今に至つては大東亞的限定地域の秩序觀に膠着し拘泥さる必要はない。

　日本は米国と戰ひ、英國と戰ひ、和蘭と戰ひ、希臘、埃及、墨西哥、パナマ、濠洲、ニユージーランドと戰ふに至つたのである。これ等諸國はその全國土を舉げて、帝國の武力自由行使に委せたのである[。]誰かまた在來の大東亞的小秩序觀に膠着するものがあらう。日本官民はよろしく國を舉げて戰ひつゝ國を舉げて新たなる世界秩序觀を地球の中心大日本帝國を核心として構想すべく、提示するところがなくてはならない。

　惟ふに共存共榮圏この地域の経済的自給自足と、而してこれが恒久的安定感を確立し、然も人類共存の公正にして且つ公明なる正義と仁慈の皇道的要件を含蓄することによつてのみその永遠なる政治的生命は與へらるるのであらう[。]開戰間もなき今日に於て遽かにこの事を説くは聊か早計に似たれども、この大局觀に立ちて世界を達觀し、その見解に於て守るべきところ、攻むべきところ、奪ふべきところ、止まるべきところを諒得することなければ、その行動は無方針であり、散漫に終るであらう。

　我が忠勇無双の陸海軍は開戰に先[立]ちて旣に待あるの平常的防備に力を致し、萬全完璧の陣を常備し來つたのである。卽ち戰端突如として開始さるるや、電光一閃刹那を出でずして、敵の頑強を誇る牙城に逼つてこれを襲撃した。新嘉坡といひ比律賓、グワム、布哇等いづれも、敵これを失へば、彼等の亞細亞侵略策はその根底を崩壊せしむるものである。それ等を死守してのみ、初めてその謀略を日本に加へ得べきである。然もこれ等は開戰早くも一日にしての戰闘力を大半喪失し、呆然自失、戰意昏倒の狀を呈した、我が神籌鬼策と縦横自存の戰場馳驅は旣に敵の心膽を奪ふに足り、その頽勢挽回は至難である。

　凡そ米英の侵略本據は布哇と新嘉坡である。更に遡つてこの本據を指揮し支配する要衝は米太平洋沿岸とパナマアラスカと埃及と、亞丁と、濠洲とである。太平洋上の禍根、亞細亞大陸不安の禍源はそこにあるのである。而してそれ等の諸地は米英領地たると、保護領たるとを問はず、帝國に向つて宣戰したのである。この禍根を根絶することなくしては、また東亞に安定は期し得られないのである。而してこれが安定の爲の國際關係御破算の新たなる秩序觀構想の機會は爰に彼等自らの手によつて供出されたのである。何たる天賦天與の機會であらうか。天祐とは卽ちこの事、平和處理によつては斷じて能はざるところの永[遠]平和建設の契機が彼等好戰挑戰の進攻包日軍進撃行動によつて投與されたのである[。]この天惠的機會に於いて、最も正義人道に立脚せる新秩序を、これ等侵略據點に圍繞さるる地域に樹立すべく萬全完璧の構想が行はるゝのでなくては皇道の日本の面目果たして何處にかある。皇軍無碍の戰果も終に泥土に委すなきを保しまい。帝國官民たるもの、戰爭に臨むで士氣旺盛なる、この構想に於いても、大いに士氣を勵まし鋭氣を新たにして、不羈自在的の秩序建設の考究が肝要である。戰闘は必ずやその線上に沿ふて進展すべく、構想は戰線に沿ふて伸ぶべきである。

1. 『朝鮮公論』1942年1月号に掲載された。「孤舟」という号は李光洙が1910年代に用いたものだが、この時期に李光洙がこの筆名を用いるとは思われない。文体から見ても内容から見ても筆者は別人であろう。 [↑](#footnote-ref-1)